

2026年4月26日 第二礼拝

説教題『夜、主は語りたもう』使徒言行録23章1～11節

主任牧師 加藤 誠

「その夜、主はパウロのそばに立って言われた。『勇気を出せ。エルサレムでわたしのことを力強く証したように、ローマでも証しをしなければならない』(使徒言行録23章11節)

パウロはかつてユダヤ教エリート候補生として聖書を一生懸命に学んだ若者でした。いつの日か、人々から「先生」と呼ばれる有名な律法学者になり、ユダヤの最高法院の議員席に座れるようになることを夢見たのではないかと想像します。しかし、このとき、パウロはその最高法院に、手足を縛られ取り調べを受けるために立たされます。

議員たちの哀れみと嘲笑の視線に取り囲まれながらもパウロは落ち着いています。

「わたしは今日に至るまで、あくまでも良心に従って神の前で生きてきました」。胸を張り堂々と語るパウロに大祭司アナニアはかちんと来たのでしょうか。「そいつの口を打て!」と命じます。するとパウロは大祭司に向かって鋭く語ります。「白く塗った壁よ」と。これは「外側は白くきれいに見えても、内側は腐った骨でいっぱいだ」という強烈な批判です。実はアナニアは、歴史家ヨセフスによると大祭司の地位を利用して不正に蓄財した悪名高い人物で、熱心党の人たちにこのあと暗殺されています。パウロは、議員席の人間たちの「裏事情」をよく見てきていて、主イエスに出会ったときに、はっきり彼らの偽善と罪を悟ったのでしょうか。立派な服を身にまい「先生」と呼ばれていても、その内側は権力と富に執着し、神の教えから程遠い。有力者の顔色をうかがって自分の保身を考え、神からいただいた良心をどう生きるかなど考えることもない。パウロは、神の御心に真に生きる主イエスと出会う中で、かつて自分が憧れた世界の抱える闇がよく見えてきたのではないかと思います。

それにしても、パウロという人はほんとうに強い人だなあとと思います。厳しい迫害が嵐のように次々に押し寄せてきても、権力者が大きな岩のように彼の前に立ちふさがっても、その困難に立ち向かっていく勇敢さと強さを持っている人。しかし、その強さは、主イエスに出会う前と出会った後では、まったく違う質の強さだと思います。

主イエスに出会う前のパウロの強さは、自分のしていることは神の前に絶対的に正しいと疑わず、目の前の相手を自分の正しさと力でねじ伏せていくような強さでした。しかし主イエスに出会った後のパウロの強さは、主なる神の恵みの働きと導きなしには自分は何にも成し得ないこと。自分が何ができたのではなく「主は御心をなしたもう」という、主なる神を信頼し委ねる強さに変えられていきます。

例えば、ダマスコに行く途中、天からの光で目が見えなくされ、地に倒れたパウロは、人々に手を引かれないと歩けず、信仰の友に祈ってもらわないと動けず、そしてダマスコの城壁から人々にカゴを降ろしてもらわないと何もできない、己の非力と限

界を思い知らされます。これまで、何でも自分の力と正しさとで相手をねじ伏せて来たパウロにとってそれは屈辱的な経験だったはずですが、しかし、神の恵みと赦しなしには何ものしえない自分の小ささをとことん教えられて、ただ「主よ、あなたの御手のに、あなたの器として歩ませてください。あなたの御心になりますように…」と祈る者に変えられた時、パウロは「神の恵みの強さ」に生きる者とされたのでした。

人は危機に直面したとき、その人が何を土台にしているかがあらわになります。このときのパウロが実に落ち着いて堂々としているのに対して、大祭司はじめ議員たちの立ち方は、目の前の状況に影響され揺さぶられているというか、どこかふわふわしているように感じます。パウロが神から与えられた良心を土台にしているのに対し、議員たちは打算、忖度、名誉心や党派心など、人間的な思いを土台にしているからでないでしょうか。

その夜、主はパウロの傍らに立ち、語り掛けられます。夜は、私たちの魂が不安におののき、闘わなければならない試練の時であり、自分一人の無力を知らされる時です。また夜はさまざまな誘惑が心にささやきかけてくる時、試みの時でもあります。くやしい思いやさびしい思い、悲しみや憎しみなどが、夜になると私たちの心の中で活発に動き始めます。昼間は忙しくて忘れていたような思いが、夜になるととうごめき始めるのです。ある人は、悪魔が私たちの心を神から引き離そうとする時、それが夜だと言いました。「祈ったって無駄だ。見えない神に信頼するより、金の力の方がずっと頼りになるぞ」と悪魔がささやき、私たちの小さな信仰を揺さぶり、握りつぶそうと働く。それが夜です。パウロも、昼間は最高法院で議員たちを前に堂々と振る舞いましたが、夜一人になる中で、心の奥底にしまっていた思いがいろいろと吹き出していたのかもしれませんが。そのような夜に、パウロは自分の傍らに立ち語り掛ける主の声を聞くのです。パウロだけでなく使徒言行録の弟子たちは皆、夜、傍らに立つ天使や主イエスの語り掛けに慰められ、励まされています。私たちが不安と恐れに包まれる夜。しかし、そのそれぞれの夜に主は共にいてくださり、私たちの魂の奥底に語り掛けて、命の言葉を届けてくださるのです（11節）。パウロはこのとき改めて、自分を召し出し、大切な働きを委ねてくださっている主イエスの言葉に大いに励まされ、この主に信頼して歩む「強さ」をいただいたことでしょう。夜は私たちにとって心を揺さぶられ、不安や恐れの中に投げ込まれるチャレンジングな時ですけれども、その一方で私たちに語りかける主と出会う、恵みの時でもあるのです。なぜなら私たちのそれぞれの夜の闇の中に主が共に歩んでくださっているからです。

私たちが依って立つべき土台は何でしょうか。私たちが夜に聴くべき声は誰の声でしょうか。パウロのように「自分の正しさと力に依り頼む強さ」ではなく「神の恵みに依り頼む強さ」を受け取りながら、見える力が大手をふるう世界の中で、十字架と復活の主の声をしっかりと聴いて、福音を証しする働きに立てられていきたいのです。